

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：ひゃくえむ

12 回目

今回のテーマ

I. スポーツアニメの変遷とひゃくえむ

II. 子ども時代のトガシと小宮の交流について考える

III. 高校時代のトガシと小宮について考える

I. スポーツアニメの変遷とひゃくえむ

これまでのスポーツアニメと「ひゃくえむ」が異なる点は、100m 走という競技を通じて「なぜ走るのか」「なぜ生きるのか」という実存的な問いに踏み込む作品であるということである。この作品は父性の導きも母性的な抱えもない裸の個として、生きることの意味をどう掴み取るのかが問われている。

Ⅱ. 子ども時代のトガシと小宮の交流について考える

Ⅲ. 高校時代のトガシと小宮について考える

子ども時代、トガシと小宮は走ることを通じてきょうだいのような関係となり、互いの存在によって走るものの質が変わり始めた。しかし小宮の突然の転校により、きょうだい葛藤に向き合う機会すらないまま関係は断ち切れ、それぞれに処理されなかった喪失が残った。

高校時代、トガシは浅草葵の抱えのもとで潜在空間を形成し、走ることが無心に没頭できる「遊び」となり、走る意味を見出し、再び速くなっていく。一方の小宮は財津に新たな父性的対象を見出し記録を伸ばし、速くなっていくが、潜在空間を持たないまま自己愛的な殻に閉じこもり孤立を深めた。インターハイの決勝、雨の中で再会した二人。トガシは小宮に敗れるが、小宮が告げたのは「走り方、変わったね」という失望の言葉であった。潜在空間の中で走ることを覚えたトガシは、小宮が追い求めていた「あのトガシ」ではなくなっていた。小宮にとってトガシに勝ったということは空虚であり、「100m を誰よりも速く走れば全部解決する」というテーゼが揺らぎ始める。そのテーゼが揺らいだのはトガシも同様であった。二人とも解決しない思いを抱えながらも陸上を続け、10 年が経過していく。

Ⅳ. 現実逃避と潜在空間——あれから 10 年

インターハイで小宮に敗れた体験を引きずるように実業団に所属し続けるトガシ。後輩の樺木に「変わった」と告げられる——かつて小宮が失望を込めて言ったのと同じ言葉の反復である。トガシの中に埋もれていた何かに火がつくが、次の大会でも振るわず、変化を求めて海堂に会いに行く。

海堂は 15 年間財津に勝てない現実を知り尽くしながら「現実逃避は、俺自身への期待

だ」と言い切る。この言葉はウィニコットの潜在空間——現実を知り尽くした上で、現実と空想の間で創造的に生きること——を言語化したものである。しかし海堂は警告もしていた。「目を塞いで立ち止まるのと、目を見開いて逃げるのとは大きく違う」。トガシが「誰かのために走る」という理由を得たとき、海堂は走る意味を外部に置く危うさを見抜いていた。

警告は的中する。肉離れで走ること自体を奪われたとき、外部に置いた意味は機能しなくなる。公園で学童に「人生なんて賭けなくていい」と語りながら号泣するトガシ。しかしその涙こそ、まだ「本気」が死んでいない証であった。

仁神は語る。「あの一瞬のためなら、人生を棒にふれると思える」。トガシは応える。「明日生きるために死んでました。昨日までの続きを生きるくらいなら、今、全力で走れなくなります」。走れなくなるかもしれない現実と直面し、トガシは初めて目を見開く。潜在空間への再帰がここに始まる。

V. ガチになること——極上の 10 秒

日本選手権の会場で、小宮はかつての父性的対象である財津と再会する。財津は小宮に絶対王者としての孤独を語り、「本当の勝利、歓喜を与えてくれるのは対戦相手だけだ」という真実を伝えようとする。しかし小宮は「僕には僕のやり方があります」と受け取ることができない。常に上にいる誰かを追い越すことだけを目標に走ってきた小宮にとって、対等な者同士が共に走る歓喜という真実は、体験として腑に落ちるものではなかった。

準決勝には財津、小宮、海堂が同じ組に揃った。周囲の注目は財津と小宮に集中し、15 年間万年 2 位の海堂は蚊帳の外であった。しかし 1 着でゴールしたのは海堂であり、しかも日本歴代 2 位の記録であった。海堂は記録を目指したのではなく、15 年間財津と走り続ける中で記録に到達した。まさに財津が語った「誰かと勝ち取って競った一位」そのものであり、財津の遺言の正しさを走りて証明するものであった。

小宮は財津に勝ったが、人生を賭けて追い求めた記録は海堂に奪われた。財津の言葉を受け取れなかった小宮の前に、その真実が準決勝の結果として突きつけられたのである。走る意味を根底から揺さぶられたまま、小宮は決勝へと向かう。そこで出会うのがトガシであった。

トガシと小宮——「ガチになること」

決勝を前に、トガシと小宮は10年ぶりに言葉を交わす。「インハイから10年、やっと君とここで走ることができる」。走る意味を見失った10年を経て、肉離れを抱えながらもここに立つトガシ。かつて倒された存在が、再び同じスタートラインに戻ってきたのである。

トガシは再会を喜ぶが、小宮の口から出たのは意外な言葉であった。「僕らは一体何のために走ってるんだ」。記録だけを追い求めた10年間。しかしたった今、記録など気にしない海堂に記録で負けた。自己愛的な殻が内側から砕かれ、走ることを意味を根底から覆された小宮の問い。それをトガシにぶつけたのは、走ることの原点を共有した相手が目の前にいたからかもしれない。記録という殻が砕かれた小宮にとって、子ども時代に共に走った相手にしか向けられない問いであった。

トガシの答えは明快であった。「そんなの当然『ガチになるため』。それ以外要らない」。そしてトガシは自らの遍歴を語る。負けを恐れ、開き直り、敗北から目を逸らし、「誰かが見てくれている」という信仰に走ったこと。そのすべてに行き詰まった末に辿り着いたのは、徹底的な孤独の自覚であった。「人間は自分の心以外は理解できないし、誰にもどこにも居場所なんてない」。しかしトガシはそこに留まらない。「そんなものには、俺たちが本気で、本気でいることの幸福感を1ミリも奪えない」。これは海堂が語った「現実逃避は俺自身への期待だ」の別の表現であり、潜在空間の体験へのトガシ自身の到達である。

小宮は「そんな景色みたこともない」と返す。そこでトガシは二人の原点に立ち返る。「この世にはシンプルなルールがあったはずだ。100メートルを誰よりも速く走れば、全部解決する」。子ども時代に父性的な導きとして上から手渡された同じ言葉が、今度は対等な存在として横から差し出されている。「本気で走れば、すべて吹き飛ぶ。この100メートルだけは、そういう景色を見ようぜ」。それは財津が遺言として語ったことと本質的に同じものだが、財津の言葉は絶対王者という高みからのものであった。トガシは違う。一度倒され、走る意味を見失い、ようやく戻ってきた存在である。その誘いは父性的な導きではなく、共に走ろうというきょうだいからの呼びかけなのである。

そして財津は引退を表明し、決勝の走者たちに告げた。「すべてを100メートルに詰め込んで、極上の10秒を味わってください」。トガシが「ガチになること」として伝えようとしたものと、深く響き合う言葉であった。そしてトガシ、小宮、海堂、樺木は、それぞれの想いを胸に決勝を迎える。

決勝——100メートルの潜在空間

決勝のスタートラインに、トガシと小宮は再び横一線に並んだ。子ども時代の土手下で競走した日から、長い年月が流れている。あの時は突然断ち切られた関係が、インターハイでの再会を経て、今ようやくここに辿り着いた。

号砲とともに二人はデッドヒートを繰り広げる。しかしその走りの中で、不思議なことが起きる。二人の姿が、小学生時代のあの頃に還っていくのである。記録も計算も、勝敗への執着も、走る意味への問いも、すべてが剥がれ落ち、ただ隣にいる相手と夢中で走るあどけない二人の姿がそこに現れる。それはかつて子ども時代に閉じた走りの中にいた二人が、互いの存在によって走るものの質が変わり始めたあの瞬間の再現であり、同時にあの時には到達できなかった場所への到達でもある。

二人はともに走る行為そのもののの中に喜びを感じながらゴールする。しかし作品は、どちらが勝ったかを示さない。

そしてそれでいいのである。この物語が問うてきたのは「誰が速いか」ではなかった。「なぜ走るのか」「なぜ生きるのか」という実存的な問いであった。そしてその答えは、勝敗の向こう側にあった。トガシが語った「ガチになること」、すなわち本気で本気であることの幸福感。それは勝利によって得られるものではなく、走っているまさにその瞬間の中にしかない。100メートルというわずか10秒余りの時間の中で、二人は潜在空間を生きたのである。現実の重さも、孤独も、喪失も、すべてを知り尽くした上で、なおその一瞬に没頭し、隣で走る相手と共にきらめく世界を見た。財津が「極上の10秒」と呼んだものが、まさにここに実現している。

かつて子ども時代に断ち切られたきょうだい関係は、長い喪失と苦悩の歳月を経て、ここでようやく成就したと言える。排除したい相手と共に生きることを求める母の法。その法のもとで、二人はきょうだいとして横一線に並び、共に走り、共にガチになった。勝敗は示されない。しかしそこにあったのは、財津が遺言として語り、海堂が15年間の走りの中で体現してきた真実——対等な者同士が共に走る中でこそ生まれる歓喜——そのものであった。

VI. まとめ

今回、アニメ作品『ひゃくえむ』を、ジュリエット・ミッチェルのきょうだいトラウマとウィニコットの潜在空間の概念を軸に精神分析的に読み解いてきた。最後に、I章で取り上げた三作品を改めて比較し、本作の特異性を浮き彫りにしたい。

「エースをねらえ！」は、宗方コーチという明確な父性的対象のもとで、主人公が厳しい練習に耐え、先輩たちとの世代間葛藤を経験しながら成熟した個へと成長していく物語であった。そこで問われていたのは「いかにして強くなるか」であり、コートの上で一人孤独に戦う個の強さが称揚された。父性の導きのもとで方向を示され、歯を食いしばって努力する。高度経済成長期の社会が求めた人間像がそこに反映されている。

「ハイキュー！！」は、チームという共同体の中で一人ひとりが生き生きと躍動する物語であった。明確な父性の導きは薄れ、代わりに描かれたのは、チームに抱えられる中で各々が主体的にプレーし、自分の役割を見出していく姿である。そこで問われていたのは「いかに生き生きとプレーするか」であり、横にいて支え合う関係性の中でこそ人は主体的になれるという、現代の若者たちにとって自然な感覚が描かれていた。

では「ひゃくえむ」はどうであったか。本作が問うたのは、「いかにして強くなるか」でも「いかに生き生きとプレーするか」でもなく、走ることを通じて「生きるとは何か」という実存的な問いであった。

トガシと小宮は、母の法のフィールドである 100m 走の中で出会い、きょうだいとしての葛藤を抱え、突然の別離によって処理されなかった喪失を背負った。高校時代、トガシは浅草葵の抱えのもとで潜在空間の萌芽に触れたが、小宮は父性的対象の世界の中で潜在空間に触れることができないまま、記録と計算の自己愛的な殻に閉じこもっていった。10 年の歳月の中で、海棠はトガシに潜在空間の体験を言語化してみせ、財津は小宮にきょうだいとして共に走ることの歓喜を遺言として手渡そうとした。

そして日本選手権の決勝前、海棠に記録で負け、走ることを意味を根底から覆された小宮の問いにトガシは「ガチになること」を語った。それは父の法のような外部からの規範でもなく、母の法のもとでのきょうだい間の競争や比較でもない。現実のすべてを知り尽くした上で、なお本気であることの中に生まれる幸福感に身を委ねること。潜在空間の中で創造的に生きるということである。

決勝の 100 メートルで、二人は小学生時代のように夢中で走り、どちらが勝ったかは示されない。しかしそれが大切だと考える。なぜなら勝敗の彼方にあるもの——対等な者同士が共にガチになり、その一瞬の中で世界がきらめくという体験——こそが、この物語の答えだからである。

「エースをねらえ！」が父性の導きのもとで個を鍛える物語であり、「ハイキュー！！」が母性的な抱えの中で個が花開く物語であるとすれば、「ひゃくえむ」は、父性の導きも母性的な抱えもその先にあるものとして引き受けた上で、「なぜ生きるのか」に向き合い、ガチになることの中に生きる意味を見出す物語である。100 メートルというわ

ずか 10 秒余りの時間の中に、人生のすべてを詰め込んで走る。その極上の 10 秒を共に味わう。それが本作の到達点であり、スポーツアニメの新たな地平を切り開く作品であると考えられる。